



陶町歴史ロマン 5

4、中世 武士の時代

(1)鎌倉時代

この時代の東濃地方には、絶対的支配者、美濃源氏「土岐氏」がいて、一大勢力を築くこととなります。平安末期、美濃の守として東下した美濃源氏「土岐氏」は鎌倉幕府の有力御家人となり、1201年土岐光衝が鎌倉幕府より美濃国守護職を拝命し、その子光行は、子の光定は土岐地区、子の国衝を土岐市浅野に、子の国義を多治見に住ませ盤石の体制を築きます。光定の子頼貞は、執権北条家から嫁をもらっているくらいですから幕府内でも相当の力があつたのは確かなようです。

一方、先に述べたように、遠山荘は、将軍源頼朝より加藤景廉が拝領しましたが、景廉自身は幕府の重鎮として鎌倉に居を構え、遠山に赴任したことはなかったようです。その息子景朝が遠山荘に赴任、居住し初代地頭となり、名前も加藤姓から遠山姓に改名しました。

遠山家は、後に遠山七家（岩村、明知、苗木、飯羽間、明照、串原、阿木）となる分家を行い、岩村



を本家として戦国の世まで続くこととなります。景朝の嫡子景重は、宝治元年（1247年）岩村遠山家から分家し、明知に城を築き、この辺りを支配したのである。

土岐氏の力は強大で、遠山氏も土岐氏に従っていたようです。土岐氏は守護職、遠山氏は地頭職ですから当然ですが…。

陶は遠山荘に属し、南北朝、室町、戦国の世まで遠山家の支配を受けることとなります。遠山家は、以降、武田侵攻による一時的な中断、本家（岩村）の断絶はありますが、明智遠山氏は旗本として、苗木遠山氏は藩主として、両家はしぶとく明治の世まで続いています。

明智遠山氏は初代景重から24代続き、明治36年景福が没するまで700年近く続いた名家である。

(2)南北朝・室町時代

土岐氏一族は正中の変（1324年）で後醍醐天皇に呼応するも事前発覚で、土岐頼貞の子頼兼、多治見国長を失いますが、土岐光定の子頼貞は建武の中興（1334年）では鎌倉幕府を倒し、続いて南北朝の時代には北朝に付いて室町幕府内の位置を不動のものとしします。

ただ、幕府内での土岐氏の地位の増大と反比例して東濃の地位は低下してゆきます。頼貞の子頼遠が美濃の拠点長森（現岐阜市）に移し、さらにその子頼康は川手に築城と土岐氏の西移が進んだからです。

頼康の子康行は美濃の守・尾張の守兼務の幕府筆頭勢力となりました。

明智遠山氏も5代景房が足利幕府より地頭職を授かり、8代景次が永享10年（1438年）足利幕府より安堵状を受けるなど、美濃の守土岐氏のもとで幕府に忠臣していたようです。

陶に関する記録はほとんどありませんが、明智遠山氏の領地として、農業生産に励んでいたものと推測します。

しかし、室町末期の頃になると、大川に大川窯を開窯、林昌寺が開基と着実に新しい息吹が感じられる時代でもありました。

この時代の遺跡、遺物として**虎溪山永保寺**があります。



（多治見市観光協会資料より）

1313年土岐頼貞の招きで夢窓疎石が草庵を創建と伝えられます。正式名称は臨済宗南禅寺派 虎溪山永保寺。「虎溪」の名前の由来は、夢窓疎石がこの地を訪れた際、中国 蘆山の虎溪の風景（現在は世界遺産）に似ていたことに由来すると言われてています。

後醍醐天皇による建武の新政は足利尊氏によりわずか2年で失敗に終わり、光明天皇が擁立されて天皇家が分裂した南北朝時代となり、暦応元年（1338年）に足利尊氏が征夷大將軍となる。尊氏は暦応2年（1339年）永保寺を北朝の光明天皇勅願所とし、開山堂を設立した。

瑞浪の桜堂も時の天皇の勅願寺だというし、**東濃って凄い！** 国内の相対的地位は、今より相当高かったことがうかがわれます。

但し、それは室町時代初期までの話であって、土岐氏の西移（1339年土岐頼遠が長森に、1353年土岐頼康が川手に移す）が進むと東濃の地位も次第に低下してしまいました。以降、現代まで美濃の中心は岐阜・西濃であり、東濃は美濃の中心（政治的）の地位を失い回復することはありませんでした。そして、現在の東濃は明治時代に中央本線が開通すると共に美濃というより尾張（名古屋）圏の一部との位置づけを色濃くしています。